會澤正志齋の祖宗・名賢祭祀論
—民心統合との關係性を中心に—

蔣　建偉

問題の所在

「帝王の恃んで以て四海を保ちて、久安長治、天下動搖せざる所の者は、萬民を畏服し、一世を把持するの謂に非ずして、億兆一心、皆其の上に親しみて離るるに忍びざるの實こそ、誠に恃むべきなり」。このように、江戸後期水戸藩の儒者、會澤正志齋はその主著『新論』[1]國體上の冒頭で、帝王が平天下において最重視すべきなのは「億兆一心」という狀態を實現することであると主張した。

尾藤正英氏の提言以來[2]、正志齋の民心統合を祭祀論の枠組で論じることは一つのパターンとなってきた。「祀は國の大事にして、王者の民心を一にし、其の誠敬を盡し、苟且の心無から使むる所以なり」（『下學邇言』論學、一四丁）とあるように、正志齋は祭祀を通じた民心統合を目指した。そして、とりわけ大嘗祭が重視されたことは、『新論』や『下學邇言』等に明らかである。その理論構造に關して、澤井啓一氏、田尻祐一郎氏、辻本雅史氏の詳論がある[3]。三氏は天皇を祭主とする大嘗祭を中心に正志齋の民心統合を論じた。一方、大嘗祭と共に優れた業績を殘した天皇と臣下をそれぞれ祖宗・名賢として祭る祭祀もまた、『新論』、『江湖負暄』、『下學邇言』、『草偃和言』、『閑聖漫錄』等の著述で論じられているが、これまであまり注目されてこなかった[4]。

正志齋の大嘗祭の理論構造では、孝の表れの一つとされる繼志述事すなわち子が父の志・事業を引き繼ぐこと（略して繼

述）が中核概念である。臣民の先祖は昔天祖に仕えて忠誠を盡くしたとされ、先祖の志を繼承し、事業を受け繼ぐことこそが、先祖に對する孝であり、同時に天皇への忠でもあるとされる。こうして忠孝一致は實現され、民心が統合されるというのである。ここでの繼述では、家職（先祖の事業）の繼承が強調され、しかも正志齋は異姓養子反對の立場をとることから、血緣のある父子による相傳ということになる。[5] しかし功績を殘した天皇や臣下の祭祀においては、家職や血緣とは別のかたちでの、志の繼承や忠の問題が浮上してくる。なお、これは大嘗祭の繼述に似つつも、異なった構造を持つもので、本稿では繼述の語を大嘗祭について論述する場合に限定し、祖宗・名賢祭祀については、志の繼承という言い方を用いている。祖宗・名賢の祭祀は、正志齋の祭祀論や民心統合論においていかなる意味を持ち、どう位置づけられるのか。本稿ではここに焦點を當てて論じていく。

一、祖宗・名賢祭祀とは何か
―大嘗祭との共通點と相違點

正志齋が大嘗祭を「天下第一ノ大祀」（『江湖負暄』巻三）と稱し重んじていたことは著名である。しかし「宗廟の禮」と「名賢功烈の祀」の必要性についても强調したことを見逃してはならない。

古は天に事へ先を祀るの義、大嘗の一祀にして、兼て盡し全て備ふ。必しも郊社と禘嘗とを分ちて以て二と爲さず。易簡の善、蓋しまた風土の宜しきに出づるなり。若し夫れ天神の世を去ること漸く遠く、人文漸く開き、祖禰曾高親疎遠近、情文に隆殺有れば、宗廟の禮設けざるを得ず、疎數繁簡の節、制せざるを得ず。……太祖鴻基を開き、號して始馭天下天皇と爲す。瑞籬天業を光恢し、亦た御肇國天皇の號有り。……中宗區宇を再造し、禮政一新す。而して皆未だ不遷の大廟八幡宮の如き者有らざるは、……之を人情に求むるに、亦た憾む所有らざるを得んや。名賢功烈の祀、素盞嗚尊・大巳貴・少彦名・思兼・建雷・經津主・日本武尊・豐城皇子・藤大織・菅贈太政等の如きは、歴世奉祀して以て民物を鎭む。然れども功烈を遐遠に施す者、或いは未だ祀典に列せず。阿倍の臣は度島を鎭むべく……田村文室將軍は奥羽を鎭むべきが如し……及び他の祀るべき者蓋し亦た鮮からず。而して護良親王の畿甸に於ける、宗良懷良二親王の東西陲に於けるが如き、朝紳は則ち萬里小路〈藤房〉・北畠〈親

房、顯家〉・日野〈資朝〉・尹〈師俊、賢基〉の諸賢の如き、武弁は則ち新田〈義貞及宗族〉・楠〈正成、正行等〉・菊池〈武時及宗族〉・名和〈長年等〉・兒島〈高德〉・結城〈宗廣、親光〉の諸將の如き、皆身を致し國に殉ずる者なり。亦た廟に祀りて以て官社に列し、一時に屈するも萬世に伸びしめば、以て人心を興起し風俗を磨礪すべし。

（『下學邇言』論禮、三六丁）

かつて大嘗祭は天と祖先を祭るという二重の意味を兼ね、一つで十分であった。しかし天神の世が遠くなり、人類の文明が發達するにつれ、それだけでは足りなくなり、宗廟の禮と名賢功烈の祀を設けなければならなくなった、という。祖宗として擧げられるのは神武・崇神・應神・天智の四天皇であり、名賢は藤原鎌足や德川家康等、政を掌った國家の柱石もいれば、菅原道眞や楠木正成等、政治の弊害を正し、亂世を立て直そうとした名臣・忠臣もいる（祭祀對象は著作により出入がある。關係する諸資料を整理した表を本稿末尾に附した）。

さて祖宗・名賢の祭祀はよく大嘗祭と共に論じられるが、どこが共通し、どこが違うのか。その共通點は、共に國體の護持、民心統合と深い關係を持つことである。『江湖負暄』卷三の總題は「建國ノ大體ヲ明ニシテ、天下ノ人心ヲ一ニスル事」であるが、ここで大嘗祭と竝び、祖宗・名賢の祭祀が論じられる。

右ノ大功德（こうとく）（神武・崇神・應神・天智の四天皇―引用者注）ニ報ヒ奉ルハ天地ノ大義ニシテ、民心ヲ一和セシムルノ大本ナレバ、戎虜ノ民心ヲ誑誘スル其本謀ヲ伐ツノ急務ナリ。

瑣末ノ事ハ姑ク置キ、第一ニ大祖以下、瑞籬・輕島・滋賀ノ大功德ニ報ヒ奉ル事ハ、天下ノ人心ヲ一致セシムル急務大本ト知ベシ。

是等ノ類（名賢の祭祀―引用者注）モ推考シテ施行アラバ、人情風俗ヲ磨礪スル一助ニシテ、天下ノ强ミトナルベキ也。

祖宗祭祀は人心を一和・一致させる急務・大本である。一方、名賢祭祀は人心を興起し（『閑聖漫錄』功烈神祠）、風俗を磨礪する一助である。祖宗祭祀で祀られる四天皇は「人皇ノ世ノ祖宗」（『江湖負暄』卷三）であり、その祭祀は大嘗祭と同じく民心を一にすることを目指している。對する名賢祭祀のキーワードは風俗磨礪であり、人心興起である。このように、祖宗祭祀と名賢祭祀に關する表現には明確な差異がある。これは『下學邇言』論禮（三四丁～三五丁）に見られるような、祭

祀における天祖と群神を峻別する態度と軌を一にし、彼の君臣觀を示すものともいえよう。このように名賢祭祀は祖宗祭祀を補佐する意味を持つが、いずれも民心統合で重要な役割を果たしていることは明らかである。

一方で、大嘗祭との相違點は二つある。一つは祖宗・名賢祭祀は時間的・空間的により大きな廣がりを持つこと、いま一つは祖宗・名賢祭祀は家職・血縁に束縛されないことである。この二點は、第二節と第三節で具體的に論じる。

二、祖宗・名賢祭祀の時間・空間の廣がり

周知のように、大嘗祭は天皇卽位の年に行われる一代一度の祭祀である。正志齋はその祭祀空間について、次のように語る。

大嘗祭ノ如キモ、蒼生ト共ニ、生穀ノ本ニ報ラルル事ナレバ、祭禮モ天下ト共ニコレヲ行ハル。悠紀・主基モ其國ヲ定メズ、臨時ニト定セラルル故、六十餘州、何レノ國ヘモ遍ク行渡リテ、諸國ノ人、大祭アル事ヲ知ザルモノナシ。……カクノ如ク、天下ト其事ヲ共ニセラルル故、何國マデモ響キワタリテ、朝廷ニテ神ヲ敬シ、生民ノ爲本ニ報給フ事ヲ知テ、人々皆神ヲ尊ブ故、天下ノ人心一致ニナリテ、下風ヲ承ケ朝命ヲ重ジ、神ヲ敬シテ、衆民ノ心志解散セズ。（『江湖負暄』巻三）

悠紀・主基の卜定、拔穗や諸國への頒幣における使者の派遣、諸國からの物資調達、京師と各地との往復途上の宣傳等を通じて大嘗祭が諸國に知られ、その效果を發揮することが期待されている。そして、民は必ずしも直接に大嘗祭に參列するのではなく、見聞によって大嘗祭を知り、その精神を間接的に共有するのである。それに對して祖宗・名賢の祭祀は、時間的に定期的に行われ、空間的にも各地に廣がり、民にとってもより身近なものである。

1、祖宗・名賢祭祀の空間性—地緣の重視

正志齋がよく取り上げる祖宗祭祀の對象は神武・崇神・應神・天智の四天皇である。この內、應神天皇を祭る宇佐・石清水の八幡宮等があるものの、他の三天皇のものはまだ無いため、新設すべきだと彼は主張する。

祀典の重き所と申さば、神武天皇・天智天皇は太祖中宗にましませば、伊勢・宇佐・石清水等の制を斟酌ありて、宗廟を立給はんこと、至願なれども、卑賤の身憚る所あれば、論ぜず。（『閑聖漫錄』功烈神祠）

右の資料のように、神武天皇・天智天皇はそれぞれ太祖・中宗とされ、両天皇の宗廟建設は特に重要な課題とされた。

大祖ノ基業ヲ建給ヒシ地ハ、畝傍ノ橿原ノ宮ニシテ、神靈ノ留リマシマス處ナレバ、畝傍山ノ近邊ニテ地勢ヲト相セラレ神宮ヲ營建シ、……歳時ノ祭儀ヲ議定セラレ、天下ニ告布シ、大祖ノ大功德ニ報ヒ奉ン爲ニ、神宮ヲ創建セラレ、千萬世ノ後マデ天下ト共ニ神德ヲ瞻仰シ、深仁厚澤ニ報ヒ奉ルベキ旨曉喩シ、祓ノ符等ヲモ天下ニ頒布スル事伊勢ノ如クニシ、天下ヲシテ曉然トシテ大祖ノ功德ヲ知シムベシ。……次ニ天智天皇、宿弊ヲ革除シ、李唐ノ制ヲ斟酌參用シテ、制度ヲ一新シ、中興ノ業ヲ成シ給フ。故ニ國忌モ歴世ノ天皇トハ異ニシテ、永ク廢セラレズ……此大功ヲ報ヒ奉ン爲ニ、滋賀ノ舊都、或ハ山科ノ陵地ナドニナリトモ、神宮ヲ創建シテ祭祀アルベシ。（『江湖負暄』巻三）

神武天皇の神宮をその陵墓の所在地である畝傍山の附近に營み、天智天皇の神宮を滋賀の舊都、或いは山科の陵地に建て、それぞれ所縁の土地で神宮を營造することが主張された。こうした傾向は名賢の祭祀でも見られる。

神聖宗廟ノ祀典整タル上ニハ、古今功德名賢ノ祀モ敍ラルベシ。周公ノ洛邑ヲ營レシモ、「記功宗」ト云事、卽此意也。大織冠ハ多武峯、菅公ハ北野、東照宮ハ日光ニ祀ルルガ如ク、以上ノ三祠ハ大祀トスベシ。其他ノ名賢モ是ニ准ジテ、中祠・小祠ノ次第ヲ分テ祀ラルベシ。田村麿ハ伊勢ノ鈴鹿、阿倍比羅夫は蝦夷のシリベツ、楠氏ハ河内、新田ハ上毛、菊池ハ肥後、名和ハ伯耆、北畠ハ伊勢、萬里小路ハ岩倉ナドノ類、又御當家ニモ、井伊・本田・酒井・大久保・榊原ノ類、又國主、城主ノ家々ニテモ、各先祖の功德拔群ナル者アレバ、幕下ニ請テ廟議ノ上ニテ其功德を論定セラレ、實ニ尊崇スベキモノハ、其家々ニテ神トシテ祭ル事ヲ許サルベシ。（『江湖負暄』巻三）

宗廟を整えたら、名賢の祭祀を整備すべきである。これは周公が洛陽を營む時に行った「記功宗」（功を以て元祀と作す。是に於てか群神百祀擧げざるは無きなり。功宗とは功有るの宗なり）[6]と同じ趣旨であると述べている。藤原鎌足を多武峯に、菅原道眞を北野に、德川家康を日光に祭り、この三祠は名賢の祭祀の中でも別格の大祀である。その他の名賢も、これに準じ、中祠・小祠に分けて諸國で祭るべきだとされ、地緣が重視されている[7]。また、先祖に拔群の功績がある人物がいれ

ば、幕府に申請してその家々で祭ることができるようにする。このように、正志齋はそれぞれの功績に應じて、それぞれの格で名賢が祭られるべきだとする。

2、祭祀の時間性—忌日・歳時と群居をめぐって

『草偃和言』では、後掲の表のように、祖宗・名賢の内、天智天皇・藤原鎌足・菅原道眞・德川家康・楠木正成の忌日を年中の祭に織り込んでいる。また「應神天皇より以前は、年暦も久しく崩御の月日もさだかならざれば、國忌も置れず」（『草偃和言』天智天皇國忌）と述べ、應神天皇以前の天皇の忌日を設けられない理由を説明する。そうした遺憾もあったからであろうか、彼は神武天皇の祭祀について、「歳時ノ祭儀ヲ議定セラレ、天下ニ告布シ」（『江湖負暄』巻三）と言い、歳時における祭祀を提唱した。ここからも、具體的な忌日が『草偃和言』に載せられていない祖宗・名賢についても、歳時における祭祀を考えていたことが窺えよう。このように、正志齋は[8]祖宗・名賢の祭祀を考える際、忌日や歳時に注目する。彼が忌日にこだわったのは何故であろうか。そこには佛の縁日における群集禮拜に對する意識があったのではないかと考えられる。

如此天朝ニテモ、幕府ニテモ萬民ニ代リテ、天地鬼神ニ誠敬ヲ盡サセ給フ事ヲ、上ニノミ其禮行ハレテ、萬民ハ夢ニモ知ラズ。萬里ノ波濤ヲ隔テタル遠國ノ佛ノ縁日ナド云事ノミ群集禮拜シテ、己ガ誠ヲ盡ス事、「其親ヲ愛敬セズシテ、他人ヲ愛敬スルヲ悖德悖禮」ト云ト、孔子モ仰ラレシ類也。故ニ人タルモノ我家ニ生レテハ、我家ノ親ヲ尊ビ、我國ニ生レテハ、我國ノ君ヲ尊ビ、我國ノ神ヲ尊ビ、他念ナク其誠ヲ盡スヤウニ導クベキ也。（『江湖負暄』巻三）

自國の祭祀を知らず、遙か遠い國の佛の縁日にのみ群集禮拜して誠を盡くすことは、自分の親を愛さずに他人の親を愛するようなことであり、道德にも禮義にも背いている。正志齋は民が自分の親を尊び、自分の國の君と神を敬い、他念なくその誠を盡くすように導くべきであると述べる。彼はまた次のように言う。

人と生れては、群を樂むは自然の情にて、禽獸の無情なるがごときに非れば、薙染の人といへども朋友のみちを離れ得ざる也。（『迪彛篇』師道）

人として生まれ、寄り集まることを樂しむのは自然の人情である。たとえ出家した人でも、朋友が無いわけにはいかな

い。だが『草偃和言』跋文では、彼は民の群居のあり方に憂いを示す。

右『草偃和言』、鄉里の子弟・村野の民庶の字を識らざる者の爲に之を錄するなり。「群居すること終日、言義に及ばず、好みて小慧を行ふ」、夫子難しと爲す。而して博奕と雖も尙ほ其已むに賢るを稱す。近時鄉閭の閒、歲時の集會に、猥談瑣語、言ふ所多く義に及ばず。民風の汚るること、亦た宜ならずや。『周官』に、撢人王志を誦するを掌り、天下を巡りて之を語る。是も亦た王政の一端なり。今學びて撢人と爲するも、其れ或いは博奕に勝る。

ここで正志齋は孔子の言葉を踏まえつつ、『草偃和言』の執筆動機を述べる。民が歲時の集會で、鄙俗な雜談ばかりをし、義を話題にしないようでは、民風は惡くなる一方である。彼は天下を巡行し王の志を語り傳えることを職掌とした撢人(『周禮』)に倣い、民に語りかけようとする。そして「歲時の群居にも、その言義に及びたらんには、吾儕小人といへども、上に君子の德のある事を知て、仁風に靡き偃すべき一助ともならんか。」(『草偃和言』序)と言い、民が歲時の群居で義を語らい、君子の德を知ることを願うのである。この『草偃和言』で正志齋は、祖宗・名賢の忌日に集まり、彼らの志や事業を語り傳えるよう、民に呼びかける。

【天智天皇】天下の臣民たらんもの、此日には天皇の功德を思ひ、親戚・朋友にも語り傳えて、古を忘れず、禮儀の邦に生れて、戎狄犬羊の俗と異なる事を喜び、自ら志を勵まして、君子國の君子たらん事を心とすべき也。(天智天皇國忌)

【楠木正成】千古忠臣の第一等にして、人倫の模範となり、天下後世までも、義士の氣を勵すべき故也。されば貴賤となく、此日に遇て殊に同志の友をも求て、相共に義を勵し、其身の時・所・位に隨て、國家に忠を盡さん事を談論思慮して、風敎の萬一を助け奉るべき也。(楠贈左中將忌日)

このように、天智天皇の忌日には天皇の功德を思い、親戚・朋友にも語り傳え、自ら志を勵まして、君子國の君子たることを志すべきであり、楠木正成の忌日には同志を求め、時・所・位によって國に忠を盡すことを談論し考えるべきであると述べている。ここで、正志齋が親戚や朋友や同志に「語り傳え」、彼らと「談論思慮し」て、自ら志を立てるべきと言っていることに注目したい。その語り合いの內容については、同書の次の箇所を讀めば、一層イメージが豐かになろう。

【藤原鎌足】是開闢以來の名臣にして、功德の大なる、天下後世其澤を被り、制度文物みな治道の模範とならざるはなし。百世の下といへども思て忘べからず。（大織冠忌日）

【菅原道眞】大織冠以後、世に雙なき名臣にてましませば、後の世までも其德業を追念し、殊に今日は菅公の薨じ給ひし日なれば、人々菅公の志にも感激して、頑夫も廉に、懦夫も志を立ん事を思ふべき也。[11]（菅公忌日）

【德川家康】此恩澤常に忘るべからざること無論なれども……昔日の事を忘れずして、我身も安佚に耽らず、いかなる艱苦をも忍て、今日の業を怠らざらむ事を互に勸誘し、又東照宮の德澤によりて、犬羊の邪說にも迷はず、人倫の交をなし得る事をも思ひ、萬一外寇などあらむ時は……國家に忠を盡さんことを志すべき也。[12]（東照宮忌日）

このように、正志齋は定期的な祖宗・名賢の忌日に、民がその功績・德業を語り合い勵まし合い、その精神を共有し遺志を引き繼いで、自らも志を立て、一人一人が自身の立場によって「今日の業」を成し遂げることを期待していた。正志齋が民の自律性、それぞれの役割を果たすことを重んじていたことが窺えよう。前に論じた神社や制度の整備は上からの働きかけと言えようが、民が志を持ち自發的に行動することも正志齋の目指すところであった。[13]

彼は更に「朋友は則ち必ずしも里閈を同じくせず、其の志愈大なれば則ち其の交はり愈廣し。其の相ひ勸勉し誘掖すること宅里の遠近を問はず」（『下學邇言』論學、一六丁）と言い、朋友は必ずしも同じ鄕里の人でなければならないわけではないとする。志の大きい人ほど、その交友の範圍も廣い。朋友は互いに勵まし、導き、助けるもので、家や故鄕の遠近は問わないのである。また、「一鄕の善士は一鄕の善士を友とし、天下の善士は天下の善士を友とす」（同右）という孟子の言葉を踏まえ、地域・藩を超えて、同志を全國に積極的に求めることを提唱する。彼は朋友・同志が語り合いにより志を勵まし合うという相互影響を重視した。

正志齋は「不言の化」（『新論』長計等）を主張し、先行研究でもそれが强調されてきたが、その一方で、彼はこのように言葉による教化も重んじている。『江湖負暄』においては、應神天皇に倣い、同帝を祀る筥崎八幡宮を通じた『孝經』の配布を主張しており、[14]前述のように、『草偃和言』という著述もまた民のために祭の意義を語り、語り合いの素材とするため

に書かれたものであった。

ところで、こうした忌日のありかたは正志齋の發明ではなく、既に水戸藩で實施されていたものに基づき構想されたように思われる。彼は『草偃和言』附記の義公忌日の條で、こう書いている。「我常陸にも、世々の君の忌日に士臣、宗廟を拜し、終日愼み居ることなれど、……封内の臣民は、異更、此日には追慕して、遺志を繼ぎ奉らんと其志を立べきなり」。水戸藩代々の藩主の忌日に、藩士たちは宗廟を參拜し、一日言動を愼む。藩の臣民は亡き藩主を偲び、その遺志を繼承するよう志を立てねばならないと彼は言う。また東照宮忌日の條でこう語る。

忌日をば、古より終身の喪と云て、其日には居喪の時の如く、其人を哀慕するなり。……古は君の喪は父の喪と同じくして、大寶の令にも、天子及び本主の爲に、喪を服する事、父の喪に異ならず。

こうなると、忌日における服喪は父子關係でなくても行うことができるようになる。大嘗祭における志・事業の繼承（繼述）は血緣關係を持つ父子を中心に構想されていたが、祖宗・名賢の祭祀における服喪は父子に限定されていない。ここでの忌日における志の繼承は血緣關係の制約を受けず、より多くの人々に廣がりうるものである。

彼は祖宗・名賢を祭る神社の整備に加え、「又各國、皆我義公ノ定ラレシ如ク、一鄕一社ノ制ノ如クニシテ、一村毎ニ鎭守ノ神ヲ立テ、淫祠ハ盡ク除去ベシ。」（『江湖負暄』巻三）と述べ、水戸藩で實施された一鄕一社の制度を他藩に普及させようとした。こうして整備された神社は、歲時の群居の場となるべきものであった。彼は「又季秋ノ頃、村々ノ神社ニ、神事祭禮ニ歡ヲ盡シ」（同右）というように、季秋の時などに民が村々の神社で祭祀等を行い、歡を盡くす情景を描く。祖宗・名賢の忌日や歲時にも、當然ここで人々が集まって、語り合うことを想定したのであろう。それだけではなく、『江湖負暄』では元服・婚嫁・養子等の神前誓約、人々の一生の履歷を記錄する氏子帳の作成、神官による教育等、社會的機能を神社へ集中させることを構想していた。こうして、神社は民が生活する上で大切な場となるのである。

上述のように、正志齋は祖宗・名賢の神社に格を付け、所緣の土地で營造し、一鄕一社制を普及させ、國家から村落まで各レベルの神社を整備しようとした。彼はこうした神社に様々な機能を賦與し、「群居」の場、語り合い・勵まし合いの場としての役割を期待した。また忌日や歲時に目をつけ、群

居の時節を考慮した。折々に神社で集まり祭を行うことで、民の生活にある種のリズムがもたらされる。それを正志齋は孔子の言葉[15]を借りて、「一張一弛」と稱する。

今、諸國に仲冬を以て稻魂等の神を祀るは、……孔子曰く「百日の蜡、一日の澤は、一張一弛にして、文武の道なり」と。蓋し古人の民をして歡欣和樂せしむる所以はかくの如くにして、これらの義も、また祭に因りてこれを寓すべきなり。（『新論』長計）

右の資料からも、祭祀を通じ民を樂しませようという思いが見てとれよう。正志齋の祭祀をめぐる思惟の底流には、民衆生活の機微に對する纖細な眼差しが窺える。

三、祭祀對象の選定—家職・血緣を超えて

本節では祖宗・名賢祭祀の對象が、如何にして選ばれたか、價値觀と歷史觀の二點から論じる。彼らが祭祀の對象になったのは、その功德ゆえとされるが、その評價はいかなる基準や價値觀に基づくのであろうか。

1、價値觀—家職世襲の弊害への意識を手がかりとして

祖宗・名賢祭祀においては、群居の語り合いが重んじられ、その場をきっかけに民が先人たちの遺志を引き繼ぎ、自ら志を立てることが期待されている。ここでの志の繼承は大嘗祭における志・事業の繼承（繼述）とは異なり、孝を通じたものではなく、血緣・家職とはほぼ關わらない[16]。そもそも正志齋は家職の世襲自體に固執しているのではない。

姓族を重んずる事は、神州の美俗なれども、善き事にも弊は生ずる勢なれば、蘇我氏、權を世々にして天位を危くし、藤氏、權を世々にして朝威輕く、源平、世々兵權を握つて、……美俗よりして更に其の弊を生ぜしなり。天より生じたる人才は下よりも擧る事、是れ亦天道なれば、菅公も下位より出でて大臣に登れり。（『讀直毘靈』）

姓族を重視することは日本の美俗であるが、弊害もある。蘇我・藤原・源平といった特定の家が專權を握ることで、天皇家の地位は危うくなったり、輕んじられたりした。また天の生み出した人材を下からも擧げることを天道とし、その典型は大臣に拔擢された菅原道眞である。正志齋はまた大社の神職について論じた際には、次のように述べた。

サレドモ大社ノ社職モ世職ナレバ、人才ヲ得ガタシ。然レバ大社ハ是マデノ如ク頭職ノ名位バカリニ成シ置キ、其下ニ人才ヲ選テ、副職ヲ置テ、其治教ヲ佐シムベシ。

（『江湖負暄』巻三）

大社の神職は世襲であるため、人材がなかなか得られない。それならば、今までのように、トップは肩書きだけを今までのように與え、其の下に人材を選んで副職とし、實際の治教を輔佐するようにすべきだというのである。このように、正志齋は姓族の世々の專權や役職の世襲による弊害を深く感じていた。そして、彼は次のように言う。

義時・尊氏の兇惡を肆にせしは、朝政衰へて紀綱振はざりし故なり。北條・足利の志を得て子孫に傳へたるは、人衆き時は天に勝つ、子孫滅亡せしは、天定まって人に勝つなり。（『讀直毘靈』）

北條義時、足利尊氏が凶暴な振る舞いを恣にしたのは、朝廷の政治が衰え、綱紀が廢れたためである。その一族が榮えたのは、あくまで人の勢いが天を壓倒した一時的な現象に過ぎず、最後には天は人に勝り、正理が貫徹され、その子孫は滅び去った。一方、德川家康とその幕府について、次のように言う。

東照宮天下の亂を平げ給ひ、帝室を輔翼して、天功を亮け給ふ。君臣の義を正しくして、歷朝の聖恩に報奉らんが爲に、天下の國主・城主を率て京師に朝し給ふ。此時に當て天下の臣民、誰か歷朝の聖恩を仰ぎ、東照宮の大功・大義に服し申さざらん。然ば今も東照宮の神孫遺業を受繼ぎ、天下を治給ふ事を、又誰か感戴せざらん。（『草偃和言』正月元日）

德川家康は天下の亂を平定、天皇を輔佐し、君臣の義を正しくして、歷朝の大恩に報いるために諸侯を率い、天皇に拜謁した。このように家康は神孫遺業を受け繼ぎ、天下を治め、人々はみな感服した。

然るを大將軍幕下東照宮の遺意を推行ありて、大禮を修備せられし事、實に曠世の大義と申し奉るべし。……天下第一ノ大嘗祭モ絶テ久シク行レザリシヲ擧行レ、元文中ニ至テ我義公ノ獻ゼラレシ「禮儀類典」ニ依テ古典ヲ講明アリテ、禮文益々備リ、古ニ復セリト承ル。（『江湖負暄』巻三）

また、家康の繼承者が長い閒廢れていた大嘗祭等を復興させたことを彼は大義と稱する。このように、家康は正しい君臣關係を守り、天皇を尊敬し、神孫遺業を繼承して、天下を治めたから、人々は從ったというのである。以上の北條・足利と家康との對比からも、正志齋の立場は明瞭である。彼の價値觀は天皇を崇敬して、神孫遺業を繼承するかどうかにあ

る。ここでの家職や血縁の關與は限定的である。こうした思考は、祖宗・名賢祭祀にも反映される。

2、歴史觀―治亂をめぐって

正志齋は『下學邇言』論時篇の冒頭に、歴史を治亂二元論で捉え、次のように述べる。

> 天下の一治一亂有るは、猶ほ四時の寒暑溫涼有るがごとし。治極まれば亂れ、亂極まれば治まる。循環して端無きなり。隆治の世、紀綱振肅し、億兆一心、生々として活意有ること、春夏の蓊欝たるが如し。……衰亂の日、綱紀廢弛し、衆庶離渙、人々志を異にすること、秋冬の寥落たるが如し。

治亂は春夏秋冬の如く循環する。治世には、綱紀が奮い起こされ引き締められ、人々が心を一つにして、春と夏のように活氣が溢れる。一方、亂世には、綱紀が廢れ弛み、人心は離散し、秋と冬のように荒れ果て、枯れ萎れるのである。ここで注意すべきなのは、「億兆一心」であるのか「衆庶離渙」であるのかが治亂の重要な判斷基準となっていることである。では、具體的に歴史上のどの時代が治世であり、亂世であったのか。

> 夫れ國初より應神・仁德の朝に迨ぶまで、千有餘年、皇化日に洽く、治の最も長久なる者なり。履仲より皇極に至るまで二百餘年、漸く衰亂に趨く。孝德・天智の中興より大寶に至るまで殆ど百年、治化復興す。和銅より慶長に至るまで八百餘年、中間に延曆・文治の小治有りと雖も、之を要するに大勢愈亂れ、亂の最も久しき者なり。慶長より今に至るまで二百五十年、至尊上に垂拱し、大將軍奉戴輔翼し、諸侯馴服聽命し、億兆驩虞安堵し、稱して極治と爲す。（同右、八七丁）

正志齋の所謂治世は神武天皇から應神・仁德天皇までの千年餘りと、孝德・天智天皇の中興から大寶までの期間、そして德川時代の二五〇年であり、それ以外の時期は亂世とみなされる。祖宗祭祀で話題となる神武・崇神・應神の三天皇は第一の治世に屬し、「皇化日に洽く、治の最も長久なる者」というように、最も長い治世とされる。正志齋はそれぞれの天皇について、次のように語る。

> 【神武天皇】丕いに天神の業を承け、遏劉し國を建て、橿原に卽位す。君の禮を明らかにし、鳥山に孝を申べ、長く祖の恩を念ふ。種子・天富をして兒屋・太玉の遺業を奉じて以て厥の祖德を聿べ脩めしむ。（『下學邇言』論政、

五八丁）

【崇神天皇】四方を經營し、……大いに祀典を明らかにし、天神地祇を禮祭し、本に報ひ始に反り、祭政分たず、民をして向ふ所を知らしむ。（同右、五八～五九丁）

【應神天皇】堯・舜・周・孔ノ教ヲ以テ天神ノ大訓ヲ潤色アリシ原始ナレバ、是又尊崇スベシ。（『江湖負暄』巻三）

神武天皇は人皇の太祖であり、天神の事業を繼承し、君禮を明らかにし、鳥見山で皇祖天神を祀った。また種子・天富にその先祖の事業を引き繼がせた。崇神天皇は四方を經營し、祀典を明らかにし、天神地祇を祭り、祭政を一にし、民に尊ぶべきものを教えた。應神天皇は經書により天神の教えを潤色した。この三天皇はいずれも祭祀を大事にし、天祖の忠孝の教えを守り、大きな功績を殘した。

天智天皇は「漸く衰亂に趨く」局面から「孝德天智の中興」、卽ち第二の治世へと導いた。

賊臣（蘇我入鹿―引用者注）を誅し、制度を立て、中興の業を成す。……肆祀を敬しみ、教化を崇び、生民の天性に因りて、以て惟神の大道を明らかにす。（『下學邇言』論政、五九丁）

凡百の禮度・法制・衣冠・劍帶・官職・位階などよりして、國郡の分割・土田の經界・百姓里居に至まで、此天皇の經綸し給ひしより起て、今にてまします。人民の表準となり、禮儀の國となりて異域よりも君子國などと呼るる事、偏に天皇の功德にてまします。（『草偃和言』天智天皇國忌）

天智天皇は、佛教を信じ天皇の威權を凌駕しようとした蘇我入鹿を藤原鎌足の輔佐により誅戮し、宿弊を革除し、後世の基本となる禮儀・制度を立て、中興の業を成し遂げた。日本が禮義の國となり、他國から君子國と呼ばれたのも專らこの天皇の功德である。また前の三天皇と同じく、祖先祭祀や教化を重んじ、民の天性により、神聖の道を明らかにしようとした。このように、正志齋は祖宗祭祀の對象となる四天皇を語る際、天祖遺業の繼承、禮儀（特に祖先祭祀）・人倫・教化を重視し、民心を一にしたことに注目する。

名賢祭祀では、天智天皇の腹心だった藤原鎌足について、「中大兄皇子を補佐して、蘇我入鹿を誅戮し、孝德天皇を立て紀綱を振ひ、制度を修め、中興の業を成す」（同右、大織冠忌日）と述べ、鎌足は天皇を輔佐し、中興の業を完成した。しかし藤原氏は徐々に權力を恣にし、天皇を蔑ろにし始める。こうした狀況下で菅原道眞は登場した。

歴世積弊を一洗し、天下の政を修明して、再太平を致さんとす。されども、弊政を革むる事は古より權臣の欲せざる所なれば……是によりて平生の素志空くなりて、天下の亂ここに萌す。（同右、菅公忌日）

彼は天皇の信任を得、積年の弊害を正そうとしたが果たせなかった。これこそが治亂の分かれ目だったと正志齋は言う。以後の八百年は彼によれば亂世、つまり「大勢愈亂れ、亂の最も久しき者」である。

【楠木正成】義士餘多ありといへども、楠公のみ傑出して忠勇・智謀他に比倫すべきものなく、其功最著し。千辛萬苦して忠貞の節を盡し、諫行れざるに及で、忠死を快くし……。（同右、楠贈左中將忌日）

後醍醐天皇は鎌倉幕府と戰い、楠木正成・新田義貞・足利尊氏ら群臣の力で、遂に北條氏を打ち倒したが、尊氏の「謀反」（同右、東照宮忌日）により、建武の新政は挫折した。後掲の表の楠木以下の人々は南朝方の諸將である。彼らは亂世を終わらせるべく努力した人々だったが、志を得なかった、と正志齋は見る。さらに「新田の族にて德川の一流のみ參河潛居せられしが、碩果となりて、再び生ずる勢を含み、果して東照宮を生じて、遂に天下を治め給ふ」（同右、附記・東照宮忌日）と述べ、この長い亂世を終わらせたのは新田の流れを汲む德川家康だったという。

平日ノ制令言行ニ、忠孝ヲ振揚セラレシ事ハ、衆人ノ知ル處也。第一ニ天朝ヲ翊戴アリテ、屢々京師ニ朝セラレ、歴朝ノ墜典ヲ擧行レシ事少カラズ。又伊勢ヲ始トシテ名祠・大社ノ祭祀・屋宇等ヲ繕修セラレシ類モ又多シ。是其大忠ヲ實事ニ施行シタル端著ナレバ、……。（『江湖負暄』巻三）

忠孝を興起し、天朝を輔佐・推戴して、度々天皇に都で拜謁し、代々の朝廷の廢れた制度を再興し、伊勢神宮を初めとする名祠・大社の祭祀や建築を修復したこと等は、皆家康の天皇に對する大忠の表れである、と述べている。正志齋は德川家の統治を「極治」と言って極めて高く評價し、その二五〇年にわたる平和裏の統治を褒め稱える。

彼の治亂の基準は天祖の遺業がしかと引き繼がれているか、天皇が尊崇されているか、忠孝の道が貫かれているか等であった。一言でいえば、國體が守られているかどうかということである。治世を目指し、國體を繼承し、守るために大きな功績を擧げた人々が祖宗・名賢祭祀の對象となる。そして彼らは必ずしも血緣・家職と密接に結びついているとはい

えないのである。

四、祖宗・名賢祭祀の位置づけ—幕末の人心を念頭に

正志齋は西洋の意圖について、「其の實は戰はんと欲せず、市易を要求し、因りて邪教を倡え、暗に人心を移し、戰はずして人の兵を屈するの術を施さんと欲す」（『下學邇言』論政、八三丁）と認識している。また西洋の強さはキリスト教による民心統一であると考えた。[17]

然れども神聖の大道未だ明らかならず、民心未だ主有らずして、內の奇袤猶尙ほ依然たるなり。その適從する所の者は、巫覡・浮屠に非ざれば、則ち陋儒・俗學なり。……其の內主無く、外は異物に遷り易きなり。（『新論』國體上）

それとは對照的に、幕末日本では、神聖の大道（國體・五倫—引用者注）がまだ明かではなく、民心は內に支柱がないため、容易に外からの異物（これは佛教やキリスト教等、彼の所謂「異端邪說」を指す）により、移っていってしまう、という狀態にあった。彼はそれを何よりも危惧した。では神聖の大道をして、移ろいがちな民心の支柱たらしめるにはどうすべきなのか。彼は異端邪說批判[18]を展開するが、民にむけて發信する際（『草偃和言』、『閑聖漫錄』、『迪彝篇』等）、こうした批判を行うより、彼が正しいと考え、信じている價値、卽ち「神聖の大道」を民に傳えようとするような傾向が見られる。これは次の資料に見られる考え方と關係しよう。

故に聖人務めて人の善を長じ、力めて其の惡を攻めず。卽ち「苟も仁に志せば惡しきこと無し」とは是なり。今夫れ劇飲快談し、耳雷霆を聞かざるは、意有りて聽かざるに非ず、神氣發動し其の中實なればなり。耳を掩ひて聞くこと無からんと欲するも、其の聲耳に徹するは、神氣退縮し其の中實ならざればなり。是を以て聞くこと有るを免れざるなり。故に聖人人を導き善を爲さしむ。善を樂しむの心中に實なれば、其の惡自ら消ゆ。後世人を牿して其の私を去らしむ。惡を病むこと善を樂しむより深し、善を樂しむと惡を疾むと、兩つながら胸中に相交はり、其の心分かれて一ならず。其の中實ならずして、以て自ら其の惡に克つに足らず、故に其の惡未だ必ずしも消えず。（『下學邇言』論學、二一丁）

聖人は人の善を擴充し、成長させるよう務め、人の惡を指彈するのではない。また、肝腎なのは中實である。善を樂し

む氣持ちが心に充ちれば、悪は自から消える。善を好み、同時に悪を憎むのでは、心は分裂し一となることができない。心中が充實していないため、悪を克服できないのである。正志齋は自分自身の考え・價値觀を「其意ヲ禮ト政トニ寓シテ」（『江湖負暄』巻三）というように、祭祀等により傳えようとした。祖宗・名賢のような國體の繼承者・體現者、人倫の模範と目される人々を祭ることにより、神聖の大道を明らかにし、眞の忠の内實と對象を示し、民心を一にしようとした。祖宗祭祀は大嘗祭と共に民心の向かう先を示すものであったが、これはこの民心に支柱がないという問題意識と一脈通ずるものといえよう。

さて、ここまで民心に支柱なく、民心が一にならないという問題について論じてきたが、正志齋は人心の怠惰もまた、人心の不統一の大きな要因とみなしていた。

怠惰なれば則ち上下德を同じくして以て不虞に警むること能はず。心を離れ德を離るれば、土崩の勢成る。……怠惰廢弛の弊、其の害百悪に踰ゆることを見るべし。然れば則ち治まりて亂るるを忘れず、名節を勵まし、士氣を振ひ、戯怠の風を革め、士民をして忠信誠實を貴ばしむ。（『下學邇言』論政、七九丁）

人心が怠惰であれば上下の心を一にすることができず、深刻になると國が滅ぶ。怠惰の弊害は、當時の諸問題でも最も警戒せねばならないことであった。

彼は『新論』國體下で、當時の奢侈・怠惰の弊風について詳しく描寫する。また『江湖負暄』巻一では、「天下怠惰ノ風ヲ振起スベキ事」という條を設け、當時の柔弱・怠惰の風氣を指摘しているが、これは冒頭で「建國之大體、萬世ト雖モ不可變事」と、「人情時勢」によって變革すべきものはあるものの、「建國之大體」を變えてはならないという基本的立場を示した、その直後のことであって、ここからも正志齋において怠惰の克服が急務であったことが窺えよう。『下學邇言』論政（七九丁～八〇丁）では、こうした怠惰は、太平の世が長く續いた弊害の最たるものとみなされている。久しい昇平の世の弊害として、彼は武備解弛、風俗偸薄、上下奢侈の三つを擧げるが、怠惰の弊はこの三者の全てに通じるものである。正志齋はその解決策には「緩急先後の序」（同右）があり、奢侈を治めるには、風俗を振起しなければならない、風俗を振起するには、治世に居ながら亂を忘れず、武備を整えることだという。後者になるほど、喫緊の課題とみなされているのである。

この治世にいながら亂世を忘れない、という考え方が祖宗・名賢祭祀で強調されていることは第二節でも述べた。彼は東照宮忌日の條で、「弱きが肉は強きが食となり、一日片時も其生を安ぜざる」と言い、家康以前の亂世の殘酷さを活寫した。その忌日に「艱苦し給ひし事など物語をもし、昔日の事を忘れずして」と言い、亂世の艱苦を常に物語って、忘れないように唱える。第三節で述べたように、祖宗・名賢祭祀の對象となる人々の殆どは亂世において治世を目指した、いわば亂世の經驗者である。正志齋は第二節でこうした人物の志・功績をめぐる物語を忌日・歳時の群居で語り合い、忘れないようにと主張する。それにより、亂世のことを忘れずに、「今日の業を怠らざらむ事を互に勸誘」（同右）して、人心怠惰を防ごうと考えた。名賢祭祀は人心を興起し、風俗を磨礪するものとされたが、まさに怠惰に流れた人心を鼓舞する重要な意味を持つものだったといえよう。

以上述べたように、祖宗・名賢祭祀は幕末の民心に對する正志齋の問題意識を反映したものといえよう。すなわちそれは、怠惰に流れ、支柱を持たない民心に對する處方箋だったのである。

結びに

本稿では大嘗祭との比較から祖宗・名賢祭祀の輪郭を素描してきた。祖宗・名賢祭祀は大嘗祭と共に正志齋の祭祀論・民心統合論において重要な意義を持つ。ただし、二つの點で大きく相違しているのである。まず、祖宗・名賢祭祀はより時間的・空間的な廣がりを持ち、民にとってより身近なものになっている。正志齋は祖宗・名賢をそれぞれの所緣の土地で祭り、廟祠を建てることを提唱した。そして、群居に注目し、人々が定期的に集まり、祖宗・名賢の志や功績を語り合い、その遺志を繼ぎ、自ら志を立てることを期待していた。これは大嘗祭における民心統合を支える繼述と共通した性格を持つものであるが、大嘗祭におけるそれが孝を通じたものであるのに對し、より廣く血緣を持たない人々に廣がるものであった。このことは正志齋が血緣による家職の繼承という繼述の形に限界を感じていたことと表裏をなす。言い換えれば、祖宗・名賢祭祀は大嘗祭に補完的な役割を果たす。彼は家職や血緣にそこまで執着しなかった。道眞のように拔擢された人々も名賢に擧げられ、結局のところ名賢の條件は天祖の遺業を補弼・繼承し、天皇に忠を盡くした人であった。正

志齋が擧げた祖宗・名賢は國體を受け繼ぎ、殆ど亂世から治世へと世を動かした或いは動かそうとした人々であった。こうした人々を祀ることを通じ、正志齋は大嘗祭とはまた別の筋道から人心を一にすることを目指したのである。なお、祖宗祭祀は人心を一にし、名賢祭祀は人心を興起する働きを持ち、役割を異にしている。幕末の民心に對し、正志齋は支柱が無いこと、怠惰に陷っていることを問題としていたが、前述の兩者はこの二つの問題意識に通じるものである。彼は祭祀を通じ人心の内實を充實し、人心の向かう先を示し、人々を奮い立たせ、一にすることを期待していた。

第二節において祭祀の中における民への眼差しに言及したが、こうした側面は正志齋の民命觀とも結びつく問題であり、今回は詳細にまで立ち入れなかった。これについては別稿を期したい。

註

(1) 所引の『新論』(一八二五)、『退食閒話』(一八四二)、『時務策』(一八六二)は日本思想大系、『下學邇言』(一八四七年起稿)は會澤善發行刊本、『江湖負暄』(一八四八)、『草偃和言』(一八三四)、『對問三策』(一八三七)は『神道大系 論說編一五』、『讀直毘靈』(一八五八)は水戸學大系、『閑聖漫錄』(一八六三)は青藜閣・東壁樓刊本、『迪彛篇』(一八三三)は時雍館藏版、『讀周官』(一八五四年)、『典謨述義』(天保一一年序)は無窮會神習文庫藏を底本とした。なお、『新論』、『下學邇言』、『草偃和言』跋文、『讀周官』、『典謨述義』の原文は漢文であり、引用は書き下しを行った。引用文の一部は適宜字體を改めた。

(2) 尾藤正英「水戸學の特質」『水戸學』日本思想大系五三、岩波書店、一九七三年、五七八～五七九頁。

(3) 澤井啓一氏は『禮記』、『孝經』、『中庸』等の經書を引用しつつ、正志齋の祭祀と民心統合に關する理論構造を示し、大嘗祭における「繼志述事」(繼述)としての孝に注目する(「會澤正志齋の祭政一致論—その構造をめぐって」『フィロソフィア』六五、一九七七年)。田尻祐一郎氏は、正志齋が民心を掌握するため、大嘗祭への民衆參加の必要性を主張したと述べ、正志齋の祭祀儀禮、特に大嘗祭の體系で、幕府・諸藩が固有の位置・役割を擔っていないと指摘した(「會澤正志齋に於ける禮の構想」『日本思想史學』十三、一九八一年)。辻本雅史

氏は大嘗祭の核心理論―忠孝一致の意味を解釋し、「臣民」の行爲への評價は國體的價値を基準になされると述べた（「國家主義的教育思想の源流」『近世教育思想史の研究』思文閣、一九九〇年）。辻本氏の論點は本稿第三節と關わる。

（4）名越時正「會澤正志齋の神道論策―特に「江湖負暄」を中心として」（『神道研究紀要』、一九八五年）は『江湖負暄』の祖宗・名賢祭祀に觸れるが、詳細な分析を加えたわけではない。

（5）前掲澤井氏、辻本氏の論文を參照。

（6）會澤正志齋「作洛論下」（會澤正志齋著・名越時正編『會澤正志齋文稿』國書刊行會、二〇〇二年）七二頁を參照。

（7）正志齋は「征討すれば則ち功宗を記して、以てその地を鎭む〈古者、征討する所あれば、則ちその地方に功烈ある者を祭り、その子孫をして祭を主らしめて、以て民物を鎭めり〉」（『新論』長計）と述べ、地方ごとに功績がある人を祭り、土地を鎭めることを主張する。そして「土人の敬尊するところに因りて、その祀を秩するなり」（同右）、「是れ皆民に功德有る者にして、人情の敬慕する所なり、故に將禮以て之を稱秩す」（『典謨述義』附錄・作洛論下）と言い、その土地に功德のある人を崇敬し、祭るのは地元の人の人情であると考えた。更に「民は朝廷の、民の心を以て心と爲すを知り、望を朝廷に屬す」（『新論』長計）と述べ、人情に從って祭祀を行えば、民心を得ることができると唱える。このように、各地の人情、民心によって、地方に功德がある人を祭ることを正志齋は重視した。

（8）定期的に民を集める事については『讀周官』卷二・賓興賢能章にも見える。「歲時を以て州社を祭るも、亦た之の如くす〈疏、節會に因りて以て民を聚む〉。黨正正歲に民を屬めて法を讀み、德行道藝を書す……〈疏、族師以上法を讀むは、疎數同じからずと雖も、皆時節有り〉」。

（9）「子曰、「群居終日、言不及義、好行小慧。難矣哉」」（『論語』衞靈公）、「子曰、「飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎。爲之、猶賢乎已」」（『論語』陽貨）。

（10）正志齋は「上下心を同じくす」（『新論』長計）、「上下德を同じくす」（『下學邇言』論政、七九丁）、「上下恤みを知る」（『新論』守禦）、「上下の能く相親しむ」（『新論』國體上）、「上下の情を通ず」（『下學邇言』論政、七八丁）を强調し、「上下交（こもごも）遺棄す」（『新論』國體上）、「上下ノ情交ラズ」（『江湖負暄』卷一）、「上爲して下應ぜず」（『對問三策』）を危惧した。『草偃和言』の序言でも、「君子の德は風なり。小人の德は草なり。……『風天上に行を小畜』といへるがごとく、天上にのみ風ありても、小しく畜りては、下に及ばざらん事を畏れて」と述べ、『論語』、『易經』を引用して、爲政者と民との隔たりを憂えている。正志齋は民にどう傳達するかを常に意識し、民衆教化の必要性・緊迫性を主張する。祭政教一致を主張する彼は、祭祀・政治・教育等あらゆる方法を講じて、民衆教化の方法を講じていた。

(11) 正志齋は「故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」(『孟子』萬章下)を踏まえ、道眞を伯夷に擬えていると考えられる。

(12) こうした主張は、他の著作に屢々見られる「治に居りて亂を忘れず」の強調とも一貫するところである(『下學邇言』論政、七九丁等)。

(13) 大川眞『近世王權論と「正名」の轉回史』(御茶の水書房、二〇一二年)二一一頁では、臣下や民の自發性について指摘する。

(14) 「且朝廷ノ詔ニ、天下ノ家毎ニ、「孝經」一部ヲ藏スベキ旨ヲ令セラレシ事モアレバ、國郡ニ百家ニ付、「孝經」幾部、五年ニ一度ナドトナリトモ定テ、筥崎八幡ヨリ頒布スルヤウナル仕方モアルベシ」(『江湖負暄』卷三)。

(15) 子曰、「百日之蜡、一日之澤、非尓所知也。張而不弛、文・武弗能也。弛而不張、文・武弗爲也。一張一弛、文・武之道也」(『禮記』雜記下)。

(16) 祭そのものは、祖宗祭祀の場合、「親王・諸王等ノ才德ヲ擇デ奉祭セラレ」(『江湖負暄』卷三)、名賢祭祀の場合、「その子孫をして祭を主らしめて」(『新論』長計)というように、その子孫により執り行われるが、その遺志の繼承は大嘗祭における父子間のものに限らず、より廣汎な人々に廣がる。

(17) 「獨り一耶蘇教有るのみ」(『新論』虜情)、「妖教を用ゐて以て其の民を誘ひ、民心皆一なれば、以て戰ふに足る」(同右、國體中)。

(18) 異端邪說批判については、大場一央「「弘道館記」をめぐる會澤正志齋の教學理念」(『東洋の思想と宗教』二九、二〇一二年)、高山大毅「遲れてきた「古學」者—會澤正志齋の位置—」(『季刊日本思想史』七九、ぺりかん社、二〇一二年)を參照。

〈キーワード〉水戸學、會澤正志齋、祭祀、民心、國體

	人物	草偃和言	江湖負喧	閑聖漫錄	下學邇言
祖宗	神武天皇	崇神天皇	◎祕傍山	◎纏向	●篠柴・石清水
	應神天皇		○筥崎	○宇佐・石清水	
	天智天皇	二月三日	◎滋賀・山科	●	
賢	★藤原鎌足	一〇月一六日	○多武峯（大祀）	○多武峯	
	★菅原道眞	二月二五日	○北野（大祀）	○北野	○
	★德川家康	四月一七日	○日光（大祀）	○日光	
	坂上田村麻呂		●鈴鹿（伊勢）	●常陸・陸奥・津輕	●
	阿倍比羅夫		●シリベツ（蝦夷）	◎シリベツ山	●
	楠木正成	五月二五日	●河内	◎河内	●
名	新田義貞		●上野	◎上野	●
	菊池武時		●肥後	◎肥後	●
	名和長年		●伯耆	●伯耆	●
	北畠親房		●伊勢	◎伊勢・常陸	●
	萬里小路藤房		●岩倉		●

※の大祀○既存◎新設が望まれる●整備が望まれる（新設を合む）★名賢祭祀の中

表　主要な祖宗、名賢の祭祀（人物の苡びは『江湖負喧』による）

賢功『江湖負喧』卷三、其二「人皇一世ノ祖宗ノ神ヲモ祀典ニ列スル事」に擧げられる人物を基準とし、『閑聖漫錄』、『草偃和言』、『下學邇言』に擧げられる人物を再興シ幷諸國ノ名祀ヲ興シ、名賢祭祀の中に長計を參照し、『新論』第二、第三の文獻を參照した。『草偃和言』では廟・祠を營む人物の祠・廟を營む人物には出入がある。（例えば『草偃和言』、『閑聖漫錄』では出入があるが、『下學邇言』では廟・祠を營む人物の祠・廟を營む人物には出入がある。）